

# 『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』 の構想と成立

林 進

## 1

トーマス・マン (Thomas Mann) の小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(*Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull*) の成立過程の研究は、マンの作家としてのイデーないし思想の展開がつぶさに読み取れるという点で、実に興味深い。というのも、この小説の成立には、80年の生涯を送ったトーマス・マンの作家人生 (1875-1955) の大半が関わっているからである。

『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』の執筆時期は大きく二つに分れる。1910年から1913年までの初期と、1951年から1954年までの後期である。その二つの時期の間には約40年の中断があるが、この中断期にマンの代表作のほとんどが書かれた。たとえば、『魔の山』(*Der Zauberberg*)、『ヨゼフとその兄弟』(*Joseph und seine Brüder*)、『ファウスト博士』(*Doktor Faustus*) などがそうである。この間『クルル』は、いわば「さなぎの状態」にあったが、作者の構想の内では徐々に成長していった。

『クルル』の構想に関しては、マンの創作ノート、日記、インタビュー、手紙、あるいはエッセイや評論、さらには上述した小説からも知ることができる。こうした構想の各レベルを追っていけば、マンの作家としての内面の変遷ないし首尾一貫性を確認することにもつながり、又、そうした作者の内面の出来事が主人公クルルの人物像や小説構造に及ぼした影響なども知ることでも

きる。とくに最近、1980年代になってから『クルル』の創作資料のノートや草稿などがチューリヒの「トーマス・マン文庫」の所長ハンス・ヴィスリング (Hans Wysling) によって手際よく紹介されたことによって、作品の構想とテキストの関係をより実証的に研究することも可能になった<sup>(1)</sup>。この小論ではこれらの事柄を、いくぶん大まかではあるが、明らかにしていきたい。

## 2

トーマス・マンは、1909年2月13日に『大公殿下』(*Königliche Hoheit*) を書きあげた後すぐに新しいプランに向かった。『精神と芸術』(*Geist und Kunst*) というエッセイ、フリードリヒ大王を主人公にした歴史小説、それに『詐欺師』小説である。このことに関してマンは1909年9月2日のインタビューで次のように言っている。

私は目下あるエッセイを書いています、これは『精神と芸術』という表題をもつことになるでしょう。さらに比較的大きな物語『詐欺師』に従事していますが、これは心理学的には私の王侯小説に対する一種の補完となるでしょう。私はまた計画中の歴史小説のための最初の研究もしています<sup>(2)</sup>。

実際にはフリードリヒ小説も『精神と芸術』も完成することはなかったが、それらは『フリードリヒと大同盟』(*Friedrich und große Koalition*) という戦時随想、『芸術家と文士』(*Der Künstler und der Literat*) というエッセイの形で世に出た。それらは又、小説『ヴェニスに死す』(*Der Tod in Venedig*) の中で主人公アシェンバハの作として紹介されることになる。

プロイセンのフリードリヒ大王の生涯を明晰で力強く描いた散文叙事詩の作者、〔……〕その整理する力と対比させる雄弁さが真面目な批評家をし

てシラーの素朴文学と情感文学についての論究に比肩せしめた『精神と芸術』についての情熱的な論文の著者、すなわちグスタフ・アシェンバハ〔……〕(VIII, 450)

さて『詐欺師』小説に関しては、マンは1909年3月25日付のハインリヒ・マン (Heinrich Mann) 宛の手紙で次のように書いている。

ところで私はおおよそ下準備したものをいくつかためています。一つはエッセイですが、さまざまな時代批判を含ませることにしています。もう一つは短篇小说ですが、これは理念的には『大公殿下』につながるものですが、しかしまたちがった雰囲気をもつことになるでしょう。いわばきっと何かしら「18世紀」を含むことになるでしょう<sup>(4)</sup>。

「18世紀」とは——このことはあとでも触れるが——ゲーテ (Goethe) に代表される自伝的告白文学をさしている。又、この手紙から『クルル』が当初「短篇小说」(Novelle) として計画されていたことがわかる。1922年にこの小説の第一巻だけが『幼年時代の巻』(*Buch der Kindheit*) として刊行されたが、その Rikola 版では章分けされていない。それはこの作品が Novelle として構想されていたからであろう。

エーリカ・マン (Erika Mann) によれば、1909年当時すでにこの詐欺師小説の全体的構想は確定していた。

『クルル』についての父の計画は1909年6月までさかのぼります。父はその時点ですでに母に対してこの物語の進行を展開してみせました<sup>(4)</sup>。

『クルル』に関するいわゆる創作ノート類となると、さらに1905年までさかのぼる。「詐欺師」(Hochstapler) という小説のタイトルがはじめて記されるのは、1905年頃書かれた「ノートブック7」(Notizbuch 7) の終りから2ペ

ーじ目のところである<sup>(6)</sup>。それに、1906年頃書かれた「ノートブック9」には小説の全体的構想の核となるモチーフがすでに記されている。ここには又、「フェーリクス」(Felix) という名前も見られる。

*Der Hochstapler* lernt einen jungen Grafen kennen, der ein Liebesverhältnis hat und dem seine Familie, um ihn los zu machen, eine Reise um die Welt verordnet hat. Sie hat ihm eine große Summe dazu geschickt und verlangt Briefe von Stationen. Felix macht ihm den Vorschlag, zu tauschen. Er empfängt das Geld, sie schreiben zusammen nach dem Bädeler die Briefe, und Felix reist als Graf u. giebt die Briefe an den betr. Stationen auf, während der wirkl. Graf bei seinem Liebchen bleibt.

詐欺師は若い白爵と知りあいになる。その白爵は恋愛関係にあるが、彼の家族は彼を切り離すために、彼に世界旅行を命じた。家族はそのために多額の金を送ってきた。そして旅の逗留地から手紙を書くよう要求している。フェーリクス (Felix) は白爵に役割交換することを提案する。フェーリクスはそのお金を受ける。彼ら二人はいっしょに旅行案内書ベデカーをもとにして手紙を書く。フェーリクスは白爵として旅行し、該当する逗留地で手紙を出す。一方本物の白爵は恋人のところに滞まる<sup>(6)</sup>。

1910年1月10日付のハインリヒ・マン宛の手紙でマンは『クルル』の下準備が着々と進んでいることを知らせている。

私は詐欺師の告白のために蒐集し、記録し、研究していますが、これはおそらく私のもっとも風変わりなものになるでしょう。この仕事をしていて私にはこんなところがあるのかと驚かされています<sup>(7)</sup>。

しかしマンは書きだすのに大きな困難を感じていた。同じ年の2月17日付のハインリヒ・マン宛の手紙で「心理学的な素材はありますが、しかしプロットと出来事の経過がうまくはこびません」<sup>(6)</sup>と訴えている。が、マンはともかくこの頃執筆を開始した。それにマンはこの時期にはまだ、この作品が1年ぐらいで仕上がる、と楽観している。

私は再びある一つの小説を書いています、これはまったく奇妙な非常にデリケートな物でして、一人称形式の詐欺師の告白です。これはきつなお一年を私に要求するでしょう<sup>(7)</sup>。(1911年3月23日付 Korfiz Holm 宛の手紙)

マンは1911年6月から約一年間『クルル』を中断する。『ヴェニスに死す』執筆のためである。1912年の夏にその小説を仕上げた後マンは『クルル』の第二巻から書き始めた。このあいだの事情をマンは小説の中で反映させている。

長い間この草稿は鍵をかけたまま保管されて眠っていた。およそ一年間というものは意欲がわからず、この企てに益があるのかどうか疑いもおこって、私は忠実にあとを継続して一枚一枚積み重ねながら自分の告白をつづけることができなかつたのである。(VII, 322)

『クルル』は1913年の夏までには第二巻の第6章 (Rozsa-Kapitel) まで進む。第5章の兵役検査のシーンもすでに書かれていた。実際このシーンをマンは1914年に朗読していることも確実なようである<sup>(8)</sup>。しかし第二巻は1922年の刊行本には入れられなかつた。

『クルル』は1913年9月またもや中断を迫られることになる。今度は『魔の

山』のためである。マン夫人が結核療養のためスイスのダヴォスに滞在した（1912年3月10日～9月25日）が、彼女を見舞ったマンはそのときの印象と経験から『魔の山』の着想を得たという。1939年の講演『「魔の山」入門』（*Einführung in den, Zauberberg*'）でマンはこのあたりの事情を1911年の中断理由とあわせて述べている。

私のダヴォスの印象と経験から一つの物語を作ろうという考えがすぐに私の脳裡にこびりつきました。私の文学的状況は当時次のようでした。王子小説『大公殿下』の完成後、私は一人の詐欺師にしてホテル泥棒の回想録を書こうという奇妙な企画と関わっていました。この小説は、犯罪者で反社会的人間という形をとっていますが、根本的には『大公殿下』における小さな王子の物語と同様、芸術家の物語でした。比較的大きな断片が残っているだけのこの奇妙な本の様式は、18世紀の偉大な回想録文学及びゲーテの『詩と真実』に対する一種のパロディだったのです。しかしその調子を長く保つのは困難でした。それで別の分野の言葉と思想の中でこの様式を休息させる必要に迫られ、私は比較的長い短篇小说『ヴェニスに死す』を書くことによってこの小説を中断したのです。（XI, 606）

当時の中断理由をマンは『略伝』（*Lebensabriß*）では「非常にきわどい平衡曲芸ともいべきクルルの回想録の調子を長い間維持することは確かに困難であった」（XI, 123）と述べているが、これら二つの文章から知るかぎりでは、いずれにせよ、この時期の中断理由は文体上のものであった。つまり、『クルル』におけるパロディ的な「回想録の調子」を長く保持するのが困難だったということである。

マンは『クルル』について「これは芸術家の孤独と仮象の問題を新しく犯罪的なものに変形したものにすぎません」（XIII, 147）と言っているが、この背景にあるのは芸術家を詐欺師や犯罪と結びつけるニーチェ（Friedrich Nietzsche）をはじめとする心理学である。一方、文体上の問題となるとどう

か。「しかし私を文体的に魅惑したのは私の粗野な手本が示唆してくれた、私としてはそれまで手がけたことのなかった自伝的な直接性であった。」(XI, 122)「粗野な手本」とは、1905年にドイツ語に翻訳されて出た本物の詐欺師マノレスク (Georges Manolescu) の『回想録』のことである。しかしこれは、『クルル』の文体的な手本というよりは、むしろ事件ないし筋の展開上必要な手本であった。真に文体的な手本となったのは『「魔の山」入門』でマン自ら述べていたように、自伝文学という伝統的な叙述形式、とくにその頂点をなすゲーテの『詩と真実』(*Dichtung und Wahrheit*) の文体であった。ここにおいて現代の詐欺師マノレスクの通俗的な回想録と近代の「ゲーテ的な自己形成的自叙伝的なもの、貴族的告白的なもの」(XI, 122)とが、芸術家を詐欺師とみなすニーチェに代表される心理学を媒介にして結びあうことになった。だがマンを魅了したその「自叙伝的な直接性」(XI, 122)は『クルル』中絶の大きな原因にもなった。言いかえれば、その原因はゲーテ的な「芸術家の貴族的、告白的自画像」(XIII, 119)を詐欺師の自画像に結び合わせるという「グロテスクな思いつき」(XIII, 119)、すなわちゲーテ的な芸術家の自叙伝のパロディー化というところに求められるということである。

ちなみに「パロディー」といえば、トーマス・マンの晩年の作品『ファウスト博士』の主人公レーヴァーキューンがオペラ『恋の骨折損』(*Love's Labour's Lost*) を作曲していた時、それを行きづまらせた当のものである。「様式のパロディー的な技巧が維持し難くなっていたのである。」(VI, 280)そこでレーヴァーキューンは気分転換のためイタリア旅行に出かける。彼はその地で悪魔に遭遇することになるが、「物語の時間」は1911年か1912年の夏である。それはちょうどマンが『クルル』のパロディー様式に行きづまっていた頃のことである。そのとき小説の悪魔と主人公レーヴァーキューンはパロディーについて次のような対話をする。

彼、「わかっている、わかっている。パロディーだろう。パロディーも貴族的なニヒリズムのなかでこんなにすっかり陰気になっていなければ楽

しめるだろうけどさ。お前はこのような策略から多くの幸福と偉大を期待しているのか」

私、（怒って答える）「いいや」（VI, 322）

## 4

『魔の山』も『ヴェニスに死す』と同様、『クルル』の仕事のあい間に差し挟んだ「たんなる挿入物」<sup>(41)</sup>と考えられていた。1914年に第一次世界大戦が始まると、『非政治的人間の考察』(*Betrachtungen eines Unpolitischen*)を書き上げることが焦眉の問題となった。そこで『魔の山』は中絶された。1918年に『非政治的人間の考察』を仕上げると、次は『魔の山』か『クルル』かということになったが、結局『魔の山』が優先させられた。当時マンはこの辺のことを次のように言っている。

さてこのあと私は再び戦前のプランを仕上げることに向かいます。それは二つの小説ですが、二つともだいたい三分の一できています。まずダヴォスの物語の『魔の山』です。〔……〕二番目の仕事は詐欺師の告白です。長い年月のかかるめんどろな、しかし私にとっては非常に好ましいプランです。私はこれをいずれにしろ実現したいと思っています<sup>(42)</sup>。

(1919年4月8日付 Carl Seelig 宛の手紙)

この時期『クルル』は後回しにされはしたものの、いつか完成するという意識が作者にはあった。この意識は1920年6月のインタビューでもあらわれている。

私は、戦争によって別の軌道に乗せられるまではこの長編小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』に長い間活発に従事していました。けれどもこの問題の形成を決して一度も見失ったことはありません。『魔の山』完

結後はまずこの作品を完成しようと考えています<sup>(43)</sup>。

1924年に『魔の山』は完結するが、しかし『クルル』の執筆はなされなかった。というのは、種々の「歴史小説」の計画がおしよせてきたからである。1925年前後の手紙やインタビューの中でマンが挙げているのは、『ヨゼフとその兄弟』をはじめ、フィリップ2世やエラスムス、ルターを主人公にした小説のプランである<sup>(44)</sup>。その中でとりわけ前面に出てきたのは『ヨゼフとその兄弟』である。こうして『クルル』は今度は『ヨゼフ』小説に席を譲ることになる。

## 5

1911年と1913年の『クルル』の中絶には、回想録調のパロディーとかかわる文体の問題があった。1920年代以降『クルル』を再三とりあげようとして、そう決定できなかつたとき、その動機は部分的に変化している。「この本の極端に個人主義的で非社会的な性格が時代に合わない」<sup>(45)</sup>（1923年11月21日付 Félix Bertaux 宛の手紙）と感じたり、「芸術家の自己懐疑と告白、これは個人主義の時代の興味は確かにひくことができた事柄であるが、しかし今日の空気の中ではかなり色あせたものになってしまった」<sup>(46)</sup>（1935年9月16日付 R. Mächler 宛の手紙）という意識がマンにあった。又、別の手紙では「自我の問題性」が「少し退屈なものになった」<sup>(47)</sup>とも書いている。実際マンの関心は「個人的なもの」(das Individuelle)から「神話的なもの」(das Mythische)に移行していったのである。この事実は『ヨゼフとその兄弟』においてははっきりあらわれている。マン自身この『ヨゼフ』小説以降新しい段階に入ったことを認識していた。

概して私はたしかにこの小説によって私の作家生活の新しい段階に足を踏み入れたといえます。つまり私がいずれにせよ今回この作品によって市民

的、個人的なものから離れ、典型的、神話的なものへと移っていったという点でそういえるのです。<sup>(18)</sup> (1935年5月23日付 Louise Servicen 宛の手紙)

この移行については1942年の講演『ヨゼフとその兄弟』でマンはさらに次のように述べている。

明らかに、神話的・典型的なものの見方を獲得することは、作家の生涯のエポックを画することであって、その作家の芸術的ムードの独特な高揚を意味し、認識と造形の新しい晴れやかさを意味しています。これは、すでに述べましたように、生涯の後年にもたらされるのを常としています。というのは、神話的なものは、なるほど人類の生涯においては初期の原始的な形式をあらわすものですが、しかし個々人の生涯においては後期の成熟した形式をあらわすものだからです。(XI, 656)

「神話的・典型的なものの見方」をマンは自分の「老齡化現象」<sup>(19)</sup>とむすびつけているが、一方これは同時代の文学傾向でもあった。ジョイス (James Joyce) の『ユリシーズ』(*Ulysses*) (1922)、リルケ (Rainer Maria Rilke) の『オルフォイスに寄せるソネット』(*Die Sonette an Orpheus*) (1923)、ブロッホ (Hermann Broch) の『ウェルギリウスの死』(*Der Tod des Vergil*) (1945) など、神話の復活が時代の潮流のひとつであった。「神話的・典型的なものの見方」とは、その作家によって微妙な違いがあるが、マンの場合は、大ざっぱにいえば、個人の中に典型を、時間の中に無時間的なものを見つけた見方である。マンの小説人物は、初期からずっと何らかの役割を演ずる俳優的性格をもっていたが、後期の小説人物でとくに新しい点というのは、彼らの演ずる役割の背景に神話的な原型があるところである。トーマス・マンの作家としてのほぼ全生涯——「市民的、個人的なものから神話的、典型的なもの」へと進んでいった生涯——にわたって構想されたクルルの詐欺師精神の発

展ほどそうした変遷をはっきり示すものはない。マンは1926年12月23日付のエーリカ・マン宛の手紙で、ヨゼフを「一種の神話的詐欺師」<sup>(20)</sup>と呼んでいるが、これは裏を返せば、初期段階に構想されたクルルの人物像はヨゼフが出現したことによってもはや過去のものとなったことを意味している。

結局、フェーリクス、この神の子は今や彼の神話的兄弟ヨゼフによって追い越されました。それでこの回想録はおそらく一つの美しいトルソにとどまるでしょう<sup>(21)</sup>。(1938年1月28日付 Hermann Kesten 宛の手紙)

しかしこれで終わりということにはならなかった。『ヨゼフ』小説に席を譲り、いわば「さなぎの状態」にあったクルルは、作者の構想の中で神話的詐欺師ヘルメスの役割を意識して演ずるまでに成長することになる。

6

『ヨゼフ』四部作の最後の第四部『養う人ヨゼフ』(*Joseph, der Ernährer*)が完結してまもない1943年3月15日のトーマス・マンの日記によれば、このとき『クルル』の再執筆をカーチャ (Katia) 夫人からすすめられたが、マンは、「芸術家」時代の産物、すなわち芸術家と市民という問題が支配的であった『クルル』の思想ないしイデーを「古びたもの、ヨゼフによって追い越されたもの」と考えていた。しかしこのすすめを「主として生涯と作品の統一という観点から」歓迎した。そして『クルル』を再び取り上げることを「古い基礎の上に建て増してゆく利得」と見做した<sup>(22)</sup>。それにもかかわらず、1943年3月の終わりから4月の初めにかけてのマンの日記には、すべて『フェウスト博士』のための研究が記録されている。ところがある日、1943年4月10日、『クルル』のための資料包みを解いて、その準備の仕事を読み返してみたとき、『クルル』と『フェウスト』素材との間に内的親近性があることに気づいた。

『詐欺師』とファウスト素材との間に（ファウスト素材においては悲劇的・神秘的な、『詐欺師』においては諧謔的・犯罪的な孤独のモチーフに基づく）内的親近性のあることを洞察した。（XI, 159f.）<sup>(23)</sup>

しかし「今日の私にとってよりふさわしいもの」ということで、ファウストのほうへ「天秤は傾いた。」（XI, 160）またもや『クルル』は先を越されたのである。

ところで、中断後30年を経た1940年代に『クルル』の再執筆を考慮していた頃、マンは『クルル』に対して「悪漢小説」（Schelmenroman）や「冒険者小説」（Abenteurerroman）という概念を好んで使用するようになる。たとえば、1947年10月10日付 Agnes E. Meyer 宛の手紙でマンは「『クルル』断片を現代の豪華馬車時代（Equipagenzeit）に演じられる悪漢小説に仕立てること」<sup>(24)</sup>を報告している。1947年11月25日にヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse）に宛てた手紙では「『フェーリクス・クルル』の断片を本格的な悪漢小説に仕立てるといえるのはどうでしょうか」<sup>(25)</sup>と書いている。

Schelmenroman ないし Abenteurerroman という概念を使用する際のモデルは17世紀の『ジンプリツィウス・ジンプリツィシムス』（*Simplcius Simplicissimus*）であった。マンはこの古典的な悪漢小説ないし冒険者小説を『クルル』継続を考えていた1944年頃に読んだらしい<sup>(26)</sup>。1951年～1954年の後期創作時、『クルル』を部分的に発表したり朗読したりする際、マンはほとんどいつも『ジンプリツィシムス』をこのジャンルにおけるドイツの原型であると指摘している。たとえば1953年、『クルル』の第三巻第5章だけが『邂逅』（*Die Begegnung*）と題されて刊行されたとき、その序文でマンは「回想形式で語られるこの物語は、『ジンプリツィウス・ジンプリツィシムス』をドイツの原型とする冒険者小説の型と伝統に属している」（XI, 704）と言っている。初期創作時（1910～1913）にはマンはこのジャンルについての緻密な知識をもっていなかった。にもかかわらず当時成立した部分がすでに Schelmenroman ないし Abenteurerroman との類似を示しているのは、マンが『クルル』の最

初の構想期にマノレスクの『回想録』を知ったからだ、と Schneider などは指摘している<sup>(27)</sup>。すでに述べたように、『クルル』の筋を展開する上でマノレスク自身の生涯の回想記が非常に役立ったことは確かなようである。Schneider が挙げているところによれば、『クルル』とマノレスクの『回想録』との類似点は、盗み、エロティックな行為、都市から都市への旅行、そして——これは『クルル』では構想のみで実現しなかったところであるが——世界旅行、晩婚、監獄生活などの部分である<sup>(28)</sup>。後期の創作時の直前に読んだといわれるバロック時代の小説『ジンプリッツィシムス』と『クルル』との類似点とはいえば、まず主人公とフランス婦人との情交、そして主人公がヘルメス役を演じるエピソード、さらに両主人公ともに宇宙の万物の根源をめざして旅をする、などが挙げられる<sup>(29)</sup>。ともあれ、『クルル』の一人称による物語の回想形式、物語の舞台の度重なる変転とその都度ちがった恋人とのエロス体験といったエピソード的構造などは、Schelmenroman の特徴といえる。

1947年1月29日『ファウスト博士』が完成する。この時期のマンの手紙には『クルル』を書く計画のことがよく語られているが、しかし、いつものように、またもや他の小説のプランがまちかまえていた。それは「中世の聖人伝の短篇小説」<sup>(30)</sup>のプランであったが、結局またもやそれが先ということになった。『クルル』は、1950年10月26日にその『選ばれし人』(Der Erwählte)が完成した後、やっと執筆再開にこぎつけた。1913年に申断して『魔の山』に専念して以来すでにおよそ40年の歳月が流れていた。

## 7

執筆再開を証明するものとして、1951年1月8日付の Otto Basler に宛てた手紙がある。

彼らが今フランクフルトで私の仕上げたものから一冊の本を拵えているあいだに、私は40年前にやり残したものを再び引き継ぎ、フェーリクス・ク

ルルの告白を書き続けていこうとしています。これまでのすべての時間と、そのあいだになされた一切を飛び越えて弧を描くのは、ある意味で楽しいものです。しかしそのあいだに多くのことがなされましたし、フェーリクスはヨゼフによっていちじるしく凌駕されてしまいました。この仕事がお長く自分の口にあうかどうか、見てみなければなりません<sup>(91)</sup>。

トーマス・マンは1951年、約40年間の中断の後、この小説を再び取り上げた際、初期に練った『クルル』の全体構想に固執した。このことは1910年に書かれたノートと1951年に書かれたノートとを比べてみればよくわかる。1910年の Notizblatt 560には次のように記されている。

Felix Krull wird mit 20 Jahren Kellner, lernt mit 21 den jungen Aristokraten kennen, an dessen Statt er reist. Kehrt mit 22 zurück. Arbeitet bis 27 als Hôteldieb. Von 27 bis 32 im Zuchthaus. Heiratet mit 34. Gerät mit 39 wieder in Untersuchungshaft und wird von Polizisten an das Sterbebett seiner Frau begleitet. Flucht aus dem Untersuchungsgefängnis und Entweichung nach England.

フェーリクス・クルルは20歳で給仕になる。21歳で若い貴族と知り合う。彼のかわりにクルルは旅をする。22歳のときその旅行から戻る。27歳までホテル泥棒をする。27歳から32歳まで刑務所の中。34歳で結婚。39歳で再び刑務所に拘留され、そして警官に伴なわれて妻の死の床に面する。脱獄してイギリスへ逃亡<sup>(92)</sup>。

1951年の Notizblatt 553 では次のように記されているが、その和訳は省略させていただく。

Felix geboren 1875. Vater stirbt, als er 18 ist

1875

18

1893 Tod des Vaters

Tritt ein Jahr nach dem Bankerott (1894) in sein 20. Jahr.

Die Verlobung Olympias war zwischen Weihnacht und Ostern. Im Herbst Tod des Vaters. Er besucht noch bis Ostern die Schule wird nicht versetzt und geht nach Paris, nachdem er im Mai 19 geworden.

Lernt ein Jahr später (1895) den jungen Aristokraten kennen, an dessen Stelle er reist. 20 Jahre.

Kehrt von der Reise 1896 zurück (mit 21)

1896

1875

21

1896

Arbeit bis zu seinem 27 Jahr (6 Jahre) + 6 bis 1902 als

1902

Hoteldieb. Von 27-32 im Zuchthaus (1907)

Heirat mit 33, also 1908

Ehe 5 Jahre: 1913, bis er 38 ist

Dann wieder Untersuchungshaft, Tod der Kleinen, Flucht aus dem Gefängnis, Flucht nach England, Erbschaft. Schreibt mit 40

1875	1875	1875
------	------	------

<u>17</u>	<u>40</u>	<u>40</u>
-----------	-----------	-----------

1892	1915	1915
------	------	------

*Schimmelpreester* mag, als Felix 17 ist, 45 sein. Das ist d. J <ahr>

1892. Als Felix 40 ist (1915) und der Pate stirbt, ist

dieser also

40	45
<u>17</u>	<u>+23</u> 68 Jahre alt. <sup>(65)</sup>
23	68

このノートではクルルは1875年生まれになっているが、初期のノート Notizblatt 560 を見ればわかるが、元来は1871年生まれだった<sup>(64)</sup>。おそらくマンは自分の生涯と一致させるために自分の誕生の年と同じ1875年に変えたのであろう。ともかく、上に挙げた初期と後期のノートを比べてみると、たしかに後期のほうがより詳細で厳密になっており、個々の点でも若干の変更がみられるが、しかし大筋においては変更はみられない。つまりマンは後期の創作時においても初期の小説プランにほとんど従ったのである。

『クルル』の第二巻第7章、クルルがパリへ旅立つところからはすべて後期の創作時に書かれたものであるが、その際にマンは、初期創作時に書いていた第二巻第4章と第二巻第6章を書き直したり書き足したりして、初期と後期の「継ぎ目」をできるだけわからないものにしようとした<sup>(65)</sup>。こうして後期創作時には、クルルのパリ到着、ホテルのボーイとしての勤務とそのあいまをぬったウプレ夫人との恋のアヴァンチュール、ヴェノスタ侯爵との役割交換、そしてリスボン行き列車でのクックック教授との出会い、さらにリスボンでのズーザーとマリア・ピアの母娘に対する二重の愛、といった数々のエピソードが語られることになる。ともかく『クルル』の執筆は順調に進行する。

クルルの文体になってしまいますが、勘弁してください。今はとにかくこれが自分の言葉なのです<sup>(66)</sup>。(1951年3月11日付 Alfred Neumann 宛の手紙)

トーマス・マンは1951年7月に『クルル』の原稿をもってヨーロッパ旅行に

出かける。その年の9月24日にはチューリヒの劇場で『クルル』の第二巻第7章「旅立ちと到着」(Reise und Ankunft)と第三巻第1章「サーカス」(Cirkus)を朗読する。これらの部分はその年に雑誌『ノイエ・ルントschau』(Neue Rundschau)に載ったが、マンはこの小説が完成可能かどうか不安を覚えている。

『ノイエ・ルントschau』に載せたクルル回想録の続篇からの一部を楽しんでくださったことには少しは意味があります。私がこれを発表したのは、チューリヒの劇場で私が朗読した後、それを聴いていたベルマンが出したがったからにすぎません。完成はずっと先のことです。この本を仕上げようという気分をなみ奮い起こせるかどうか、自分でよく疑わしくなります<sup>(37)</sup>。(1951年12月13日付 Hermann Kesten 宛の手紙)

執筆再開後もマンは『クルル』の中断をしばしば考えた。自分の生きられる時間が残り少ない、この小説がかなり巨大でなかなか終わりそうにない、この小説の仕事が自分の年齢にふさわしくない、他のもっとふさわしい創作プランに着手したほうがよいのではないか——作品の完成を常としてきたが故にマンはジレンマに苦しんだ。1952年4月28日付の Ferdinand Lion 宛の手紙でマンはそのジレンマを次のように表現している。

私など、いまさらフェーリクス・クルルの回想録のようなものを背負い込むべきではなかったのです。題材からいっても、それが要求するものからいっても、私の年齢向きの仕事ではありません。汎エロティシズムだの宝石泥棒だの、残り少ない人生の年月をこんな冗談ごとに向けていいものでしょうか。しかもこれは難しくて長ったらしいときています。最近書き加えたものにはいくつか注目すべきところがあるのは事実ですが、それでも私は中断しよう、肥大した断片のまま打ち切ろうと思うことがしばしばです。〔……〕他面私には「そのまま打ち切る」という習慣がまったく

ないのです<sup>(48)</sup>。

この時期マンはクルルの回想録が「『ファウスト的なもの』に変わってしまいそうな傾向をもっている」<sup>(49)</sup>という風に発言している。「ファウスト的なもの」(das Faustische)とはどういうことを意味しているのか、俄かには断定できないが、「ファウスト的なもの」と一緒に用いられている「形式を失うこと」(die Form zu verlieren)とか「この海」(*das Meer*)とか「無限の中の放浪」(eine Wanderung im Grenzenlosen)といった文句から推測すれば、おそらく後期創作時に書かれた小説の後半部の長大な会話文のところ——とくにウプレ夫人をはじめ、ヴェノスタ侯爵、そしてクックク教授との会話の場面を指しているのであろう。いわゆる「物語の時間」を比べてみても、初期に書かれた小説前半部では一つの章で数年が経過していたのに対し、小説後半部では一つの章で数日ないし数時間しか経過しなくなっている。こうした長大な広がりをもった文体を擁した場面は、『ファウスト』や『ジンプリツィシムス』などの世界文学との関わり、そして自作、とくに『ヨゼフとその兄弟』の完成がなかったなら、さらにフロイト (Sigmund Freud) やユング (C. G. Jung) やケレーニイ (Karl Kerényi) などによって「神話と心理学」、とくにヘルメス神話に精通することがなかったならば、実現しなかったであろう。

マンが最後まで1910年頃の基礎プランに固執したことは確かであるが、にもかかわらず『クルル』は初めの企図を越えたところへ展開していった。1951年に執筆再開したときのマンは、時間を主要テーマにした『魔の山』も、神話的方法を駆使した『ヨゼフとその兄弟』も書き終えていたが、このことは、初期から後期に至るまで終始一貫した主題、すなわち芸術および芸術家にかかわるテーマに、後期創作時の段階で時間を明確に意識した新たな視点、つまり歴史のかつ神話的視点が加わることを意味した。今やマン及びクルルの思考の出発点にはいつも「原初的なもの」とか「始源」(VII, 594)が存在することになった。1951年の秋にトーマス・マンはシカゴの「自然博物館」に二度目の訪問をするが、マンはこのときの印象をヘルマン・ヘッセに次のように報告して

いる。

そこでは——陸地がまだ荒漠として空虚であった頃の海中における——有機的生命の始源が、動物界全体が、（発掘人骨をもとに造形的に再構成した）初期人類の外見や生活がきわめてわかりやすく描き出されています。私は洞窟の中のネアンデルタール人（この系統の人間の進化はネアンデルタール人で中絶します）のグループを決して忘れません。それにまた岩壁に、おそらく魔術的な目的のためでしょうが、動物の姿を植物からつくった絵の具で、夢中になってうずくまったまま描いている芸術家の元祖たちを忘れません。私はすっかり魅せられましたが、これらの幻影を見て人が心ぬくもり、魅せられるのは、独特の共感によるものです<sup>(40)</sup>。

この文章から「宇宙への共感」（VII, 548）という小説後半部の重要なモチーフとのつながりを指摘するのも可能であるが、その直接の影響といえば、むしろ小説の第三巻第7章のクルルがリスボン博物館を訪問したときの場面に色濃くあらわれている。

洞窟がぼっかりと開いた。広いその洞窟のなかではネアンデルタール人が火を掻き立てていた。〔……〕私は自分とそのネアンデルタール人とを区別することができなかったが、それからまた何十万年も前に剝き出しの岩窟の中にひとりぼっちでしゃがみこみ、妙に熱心に野牛、かもしか、そして他の狩猟動物、さらには狩人などを描いた絵でもって岩壁を覆っていた変り者と自分とを区別することもできなかった。（VII, 578f.）

1952年5月に『クルル』の第三巻第5章、クックック教授との対話の場面を書き終えると、マンはこの小説の執筆を一時中絶して比較的長い短篇『欺かれ

た女』(Die Betrogene) を書き始める。

最近かなり疲れることがよくありますが、絶えず仕事をしています。目下のところは必ずしもクルルの原稿というわけではなくて、一つの短篇です。これでどうやら浩瀚な作品が中断することになると思うとすっかり快適な気分になります。私はこの辺で一度何か仕上げたいのです<sup>(41)</sup>。

(1952年5月16日付 Ida Herz 宛の手紙)

1953年3月18日、『欺かれた女』が完成する。そこで『クルル』の稿を続ける。

例の女性の物語は仕上がりました。今は実際またもや『クルル』のための古い材料に向かい、書き上げたところまで読み返し、あの特殊な「歌うような調子」を取り戻そうと努めています<sup>(42)</sup>。(1953年4月11日付 Max Rychner 宛の手紙)

『クルル』はさらにドン・カルロス王に謁見する場面、ズーズーとの愛についての会話、そして最後の章となる闘牛と裏庭の場面などが書かれた。1953年10月にはこうしたリスボンでのエピソードを書きあげ、次の舞台アルゼンチンでのマイヤー・ノバロ 双子兄妹を描く予定を立てていた<sup>(43)</sup>。しかしこれは実現しなかった。マンは、年の変わり目の1954年1月、現存の原稿をまとめて『詐欺師フェーリクス・クルルの告白——回想録第一部』と題して出版する決意をした。

フェーリクス・クルルの告白に私はとうにまた書き疲れています。ひとまず『第一部』を出せるだけの原稿は出来ています。もしもこの冗談があまりにも私の年齢にふさわしくないと思われれば、私はさらに全然別のものを書きはじめます<sup>(44)</sup>。(1954年1月19日付 Karl Kerényi 宛の手紙)

こうして『クルル』は1954年の秋に刊行された。マンの予想に反して、マン自身この小説を過小に評価していたが、大きな反響を呼んだ。「二万部の初版本はすでに売り切れました」<sup>(45)</sup>とマンは発売後まもない頃の手紙の中で嬉しい悲鳴をあげている。

ところで、この小説の全体構想からみれば、実際に書かれたのはその半分にも満たない。1910年頃に記された小説全体の基本構想では、

Erster Teil: Jugend.

Zweiter Teil: Kellner und Reise.

Dritter Teil: Höteldieb

Vierter Teil: Zuchthaus

Fünfter Teil: Ehe

Sechster Teil: Der Kleinen Tod. Flucht. Ende.<sup>(46)</sup>

となっている。このうち実現したのは上から二行目までの「第一部、青春」「第二部、給仕と旅行」だけである。ここでついでに、マンの残した創作ノートをもとに、実現しなかった構想のあらましを言えば、主人公クルルの世界旅行は、リスボンからさらに船旅でリオデジャネイロ、ブエノスアイレス、ニューヨーク、サンフランシスコ、ホノルル、神戸、コンスタンチノーブルといった各都市を経た後、オリエント急行でパリへ戻って完了する。このときクルルは21歳である。それから27歳までホテル泥棒として働き、その後32歳まで獄中暮し。33歳から38歳まで結婚生活。再び入獄。妻の死。脱獄。英国へ逃亡。名付親のシンメルプレスターから遺産相続してロンドンの何処かに隠棲。そこで回想録を書きはじめるが、このときクルルは40歳、といった具合である<sup>(47)</sup>。実現した『クルル』はこの最後の部分から始まる。小説の冒頭で読者の前に姿を見せる回想録作者クルルは「隠棲」(VII, 265)の日々を送る「40歳」(VII, 270)の男である。

さて、マンは『クルル』を刊行した後も、クライスト短篇集アメリカ版の序

文を書いたり、『チェーホフ試論』 (*Versuch über Tschekow*)、『シラー試論』 (*Versuch über Schiller*) を仕上げるなど、精力的な活動をした。そのあいだ『クルル』は一語も書き継がれなかった。

クルル小説は40年以上前から最後の部分まで計画されていました。しかし継続部分についてはまだ一語も用紙に書きつけていません。この物がいつか完成するかどうかは、私になお与えられている時間にすべてかかっています<sup>(48)</sup>。(1955年4月4日付 Paul Burkhard 宛の手紙)

しかし『クルル』はもはや二度と書かれることはなかった。トーマス・マンの死は、この手紙の日付から4か月余り後の1955年8月12日に訪れた。

#### テキスト

Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt am Main 1974.

引用箇所は本文中の括弧内に巻数とページ数を記した。

#### 注

- 1 Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 5. Narzissmus und illusionäre Existenzform*. Bern und München 1982.
- 2 Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.): *Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann 1909-1955*. Hamburg 1983, S. 27.
- 3 Thomas Mann/Heinrich Mann: *Briefwechsel 1900-1949*. Hrsg. von Hans Wysling. Frankfurt am Main 1975, S. 73.
- 4 Paul Scherrer/Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 1. Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns*. Bern und München 1967, S. 238.
- 5 Ebd., S. 236.
- 6 Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 5*, S. 390.
- 7 Thomas Mann/Heinrich Mann: *Briefwechsel 1900-1949*, S. 83.
- 8 Ebd., S. 85.

- 9 Paul Scherrer/Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 1*, S. 240.
- 10 Ebd., S. 246.
- 11 Vgl. Ebd. S. 242.
- 12 Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main 1979, S. 159.
- 13 Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.): a. a. O., S. 45.
- 14 Vgl. Paul Scherrer/Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 1*, S. 244f.
- 15 Ebd., S. 248.
- 16 Ebd.
- 17 Ebd.
- 18 Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*, S. 390.
- 19 Ebd., S. 352.
- 20 Ebd., S. 261.
- 21 Paul Scherrer/Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 1*, S. 250.
- 22 Vgl. Thomas Mann: *Tagebücher 1940-1943*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main 1982, S. 552ff.
- 23 Vgl. Ebd., S. 561.
- 24 Thomas Mann: *Briefe 1937-1947*. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main 1979, S. 557
- 25 Hermann Hesse/Thomas Mann: *Briefwechsel*. Frankfurt am Main 1975, S. 194.
- 26 Vgl. Karl Ludwig Schneider: *Thomas Manns Felix Krull. Schelmenroman und Bildungsroman*. In: *Untersuchungen zur Literatur als Geschichte. Festschrift für Benno von Wiese*. Berlin 1973, S. 550.
- 27 Vgl. Ebd., S. 546.
- 28 Vgl. Ebd.
- 29 Vgl. Erich Heller: *Thomas Mann. Der ironische Deutsche*. Frankfurt am Main 1959, S. 338.
- 30 Thomas Mann: *Briefe 1937-1947*, S. 557.
- 31 Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer: *Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens*. Frankfurt am Main 1974, S. 255.
- 32 Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 5*, S. 405.
- 33 Ebd., S. 488f.
- 34 Ebd., S. 405.
- 35 Vgl. Ebd., S. 516-520.

- 36 Thomas Mann: *Briefe 1948-1955*. Hrsg. von Erika Mann, Frankfurt am Main 1979, S. 191.
- 37 Ebd., S. 236.
- 38 Ebd., S. 251.
- 39 Thomas Mann: Brief an Karl Kerényi [vom 20. 3. 1952. In: *Dichter über ihre Dichtungen*. Hrsg. von Hans Wysling/Marianne Fischer, Heimeran/Fischer 1975, S. 338.
- 40 Hermann Hesse/Thomas Mann: *Briefwechsel*, S. 231.
- 41 Hans Bürger/Hans-Otto Mayer: a. a. O., S. 261.
- 42 Thomas Mann: *Briefe 1948-1955*, S. 292.
- 43 Vgl. Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 1*, S. 255.
- 44 Hans Bürger/Hans-Otto Mayer: a. a. O., S. 272.
- 45 Thomas Mann: *Dichter über ihre Dichtungen*, S. 370.
- 46 Hans Wysling: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 5*, S. 405.
- 47 Vgl. Hans Wysling: *Pläne zur Fortsetzung des Krull*. In: *Thomas-Mann-Studien. Bd. 3. Dokumente und Untersuchungen*. Bern und München 1974, S. 149-155.
- 48 Thomas Mann: *Dichter über ihre Dichtungen*, S. 378.

(1988年10月5日受理)